

## 道徳学習指導案 5

### 1 主題名 豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて～

4－（3） 差別や偏見のない社会の実現

### 2 主題について

中学生になると社会の在り方について目を向け、差別や偏見に対する問題意識をもち始める。しかし、他人より自分を優位に見せたがったり、立場の弱いものに対して横柄な態度をとったり、また、人の噂や不確かな情報で相手をとらえ、傷つけたりすることがある。このような生徒にとって学校生活や社会における差別的な問題や様々な偏見について考える機会をもつことは大切である。

よりよい人間関係や社会生活を築いていく上で、一人一人が人間として、個人として尊重されなければならない。立場や考えの違い、個人の意思を超えた人種や性別、容姿、そして病気などによって不公正な差別や偏見があってはならない。また、不確かな情報や噂などによって人を傷つけることがあってはならない。人の痛みに関心、正しい理解に立って、差別や偏見のない社会を築いていこうとする気持ちを育てていきたい。

資料「豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて～」は次のようなあらすじである。

流域の人たちにとっては、安らぎと生活の場になっていた阿賀野川。しかし、上流の昭和電工鹿瀬工場から出されたメチル水銀を含む排水によって汚染されてしまう。そして、汚染された魚を食べた人たちが発症していった。はじめ原因がよくわからずタタリや伝染病と言われていたため、佐和子の父は差別や偏見を恐れ、病気になったことを隠そうとする。腕のいい建具職人だった父は、病気によって思うようなものができなくなったことに苦悩する。やがて、父も生きるため、そして自分がどうしてこんなになったかをはっきりさせるため認定を求める。しかし、認定を求める闘いは厳しいものだった。患者の苦悩は、病気になったことに加え、いわれなき差別や偏見もあったことを共感的にとらえさせ、差別や偏見のない社会を求めていこうとする気持ちを高めていく。

### 3 ねらい

新潟水俣病について理解を深め、被害者の心身の苦悩を共感的にとらえることを通して、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする気持ちを高める。

### 4 展開のための視点

新潟水俣病は、新潟県で発生した公害病であり、原因や影響について正しい理解が必要である。展開に当たっては、生徒のこれまでの新潟水俣病についての学習状況をふまえ、新潟水俣病の基本的な事項の理解について配慮した指導が必要である。このため、生徒の実態によって、ねらいや授業の構成などの工夫が必要である。

佐和子の父が、差別をおそれ水俣病であることを隠そうとする葛藤や建具職人として自分を生かすことができなくなった無念さを共感的に理解させることによって、新潟水俣病が個人の生き方や地域社会の信頼関係に与えたダメージをとらえさせる。被害者に

とっての苦悩は病気になったことだけでなく、いわれなき差別や偏見もあったことを理解させる。また、「ニセ患者」「金目当て」「タタリ」などという被害者を傷つける言葉や差別、偏見を生む背景には、水俣病についての理解が不十分であるということだけでなく、被害者が補償を受けることへの妬み、さらには、自分はその人たちとは違う、自分は差別されたくないという心の弱さや醜さがあることを捉えさせたい。この学習を通して、差別や偏見を生まない気持ちを強くもたせたい。

## 5 展開例

○学習活動●学習内容□主な発問	◇指導上の留意点	資料	配時 (分)
<p>○新潟水俣病について関心をもつ。</p> <p>□ 新潟水俣病について、知っていることを挙げてみましょう。</p> <p>●既知の情報を出し合い、情報を整理し確かめる。</p>	<p>◇生徒からの情報を整理し、発生の時期、場所、原因など基本的に押さえるべき点を確認する。あらかじめ表などにまとめておくとよい。</p>		10
<p>○資料を読み、新潟水俣病に見る差別や偏見について考える。</p> <p>□ 佐和子の父は何を苦悩しているのでしょうか。また、被害者にはどんな言葉が向けられたのでしょうか。</p> <p>●体の苦痛だけでなく、差別や偏見を恐れ、病気のことを隠そうとする父の気持ちを理解する。 【体の痛み】</p> <p>●病気で手がしびれ、疲れやすくなったこと。 【心の痛み】</p> <p>●納得する仕事ができなくなったいらだち。</p> <p>●家族、とくに佐和子への差別や偏見を恐れる気持ち。</p> <p>●「ニセ患者」、「金目当て」「タタリ」「あそこから嫁をもらいな」などといった心ない中傷が行われたこと。</p>	<p>◇病気で手がしびれ、疲れやすくなったため、建具職人として自分の納得する仕事ができなくなった父の苦悩を共感的にとらえさせる。</p> <p>◇家族とくに佐和子への差別や偏見を恐れる父の気持ちをとらえさせる。</p> <p>◇新潟水俣病にかかわって具体的な言われなき差別や被害者を傷つける言葉をとられる。</p> <p>◇河口付近の「水俣隠し」に見られる「差別や偏見」の厳しさを理解させる。</p>	<p>・資料「豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて～」</p>	10

○学習活動●学習内容□主な発問	◇指導上の留意点	資料	配時 (分)
<p>□ もし佐和子の父と自分が同じ立場だったらどう考えるのでしょうか。また、被害者を「ニセ患者」や「金目当て」と言って中傷をしたり、差別をしたりしたのはどんな気持ちからでしょうか。</p> <p>●被害者を自分に置き換え、差別や偏見について考える。</p> <p>●人間のもつ弱さや醜さ、正しい理解の不足などが差別や偏見を生むことを理解する。</p>	<p>◇もし、自分が中傷されたり差別されたりしたら、相手に言ってやりたいこと、自分が一番嫌なこと、心配なことを挙げさせる。</p> <p>◇みんなが言っているからとか、うわさなど正しい理解に基づかない言動など差別や偏見を生む気持ちを生活実感からととらえさせる。</p>		15
<p>□ 佐和子の父は、どのような思いから認定を受けようと考えたのでしょうか。</p> <p>●差別や偏見の恐れをこえて、原因究明と将来の人間らしい生活のため、認定と補償を受けようとした父の決意を理解する。</p>	<p>◇母の切実な気持ちや考えをとらえさせる。</p> <p>◇葛藤を克服し、一歩前へ踏み出そうとした父の姿をとらえさせる。</p>		5
<p>○今日の学習で学んだこと、考えたことをまとめる。</p> <p>□ 今日の授業であなたが学んだことやこのような悲劇を繰り返さないためにどうしたらよいかまとめましょう。</p> <p>●ワークシートに自分が考えたことについて書く。</p>	<p>・ワークシートを書く時間を確保する。</p> <p>・補助資料を読んで、考えを深めるのもよい。</p>	<p>・ワークシート</p> <p>・補助資料「生徒作文」</p>	10

### 《評価》

- ・ 新潟水俣病が被害者の心と体、人と人との関係に与えた被害について理解が深まったか。
- ・ 差別や偏見が人間らしい生き方を阻害することを理解し、差別や偏見をなくそうとする気持ちが高まったか。

### 【資料】

- ・ 資料 「豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて」
- ・ ワークシート 「豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて」
- ・ 補助資料 生徒作文

6 被曝映画（例）

新潟水俣病

○阿賀野川 魚 砂利 舟運など

生活の場

○昭和電工

○有害なメチル水銀をふくむ排水

○メチル水銀に汚染された川

魚を大量に食べた人が発症

貴重なタンパク源

○公害病

佐和子の父の苦悩

体の痛み

腕のいい建具職人

・手がしびれ思うように動かない

・だるい。疲れやすい

心の痛み

・納得する仕事ができなくなっただらち

・家族、とくに娘佐和子への差別偏見の不安

・「嫁のもらい手がないぞ。」

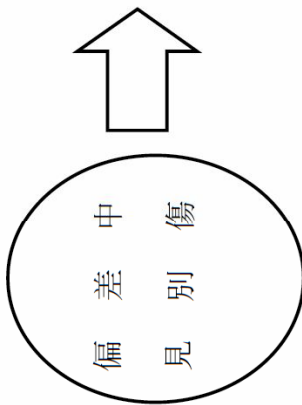
・ニセ患者

・補償金目当て

・タタリ

・伝染病

・「『ミナマタ』なら黙ってる。」



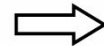
中傷・差別・偏見を生む心

○間違った情報、うわさ、誤解



正しい理解の不足

○被害者の苦しみをわからない

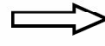


思いやりのなさ

○あの人達とは違う、自分は差別されたくない。

○補償金をもらうことへの妬み

○みんなが言っているから、違うことを言う勇気がない



心の弱さ、醜さ

一度と悲しい思いを繰り返さないために

## 7 資料

### 豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて

阿賀野川は、栃木、福島県境の荒海山（あらかいざん 1580.4m）付近を源流に、豊かな水量をたたえ越後平野を潤しながら横断し、日本海に注ぐ。上流の緑の水面は美しい木々と岩肌を映し、下流になるにつれ、水色を変え、川幅を広げて満々と水をたたえる。中州に水鳥の樂園をもつ余裕さえ見せる。その水は清く冷たい。この川で起こった悲劇を忘れさせるほど美しい姿を見せる。流域面積7,710平方キロメートル、長さ210キロメートルの日本を代表する河川である。

阿賀野川は古くから会津と新潟を結ぶ水運が発達し、多くの船が行き来してきた。船頭仕事で暮らす人も多く、会津の西の玄関口で中継地となった津川は日本三大河港<sup>\*</sup>として大いに栄えた。また、この川はウグイやニゴイ、コイ、フナなどたくさんの魚に恵まれ、流域では、昔から漁が盛んに行われてきた。たくさん捕れると近所や親戚に配るほどだった。川魚は、流域に住む人たちにとっては毎日の食卓に上るごちそうであり栄養源だった。このように流域の人たちはこの川と深く結びつきながら、その豊かさを享受し、お互いに助け合いながら生活を送ってきた。

しかし、「新潟水俣病」がその豊かな生活と地域の絆を破壊してしまった。

「いいか、病気の話は周りの人に黙っているんだぞ。」はじめ、佐和子にはこの父の言葉の意味がわからなかった。佐和子の父はこの辺では腕のいい建具職人として知られていた。父のつくった建具は細工が細かく丁寧で評判がよく、遠くから訪ねてくる人もあった。その父が病気になってから自分の思うようなものが作れない。手が震え、昔のような感覚がなく疲れやすくなったという。父は仕事も手に着かず、毎日そのぶつけようもないいだちをぐっところえていた。時々、部屋の隅で一人小刻みに肩を震わす父を見ると佐和子はとてもつらかった。

「なんで、病気のことを言っちゃいけないの。」「言ったら、周りの人にどんなふうに思われるか。お前も年ごろだし、変な噂がたったらどうする。それにお前は、何か変なところはないのか。」父はそう言うとき黙ってお茶をすすっていた。

水俣病が発生した当初、原因がわからず、「タタリ」や伝染病と誤解され、「あそこの家から嫁をもらっちゃだめだ。孫の代までたたられるぞ。」といった結婚や就職で様々な差別を受けるようになった。

病気の原因が、上流にある旧鹿瀬町の昭和電工の工場から流れ込んだメチル水銀に汚染された川魚を食べたせいだとわかった。県からの指導で阿賀野川の川魚を捕ったり売ったりできなくなった。

阿賀野川の河口付近は漁業の盛んなところだった。しかし、水俣病の原因が川魚だとわかり、また、水俣病患者が出た地域の人たちが売っているという理由で、海の魚までが全く売れなくなった。困った河口付近の人たちは患者であると名乗り出ることをやめ、「水俣隠し」が行われた。

「お父さん、私たちそんな悪いことしたん。ただ魚食べただけだよ。昔からこの辺の人たちはそうしてきたんじゃない。お父さんは被害者だよ。なんでそんなこと言われなきゃいけないの。」「いいか佐和子、病気がわかって裁判に訴えた人たちも出てきた。でもな、あの人たちが何とされているか知ってるか。『水俣病のふりして補償金をほしがってる』とか『ニセ患者』と陰口を言われてる。ひどいもんだ。この前まであんなに仲良く暮らしてきた町の者同士がそんなことを噂している。親戚同士でもそんなことを言ってる。情けないことだ。この体を何とかしてほしいだけだ。手をもとのように動くようにしてもらいたい。昔のように誰からもほめられる建具を作れるようになりたい。病気になったことはつらいし、悔しい。でもな、俺が一番つらいのは・・・」佐和子は、そんな父の苦悩する姿を見ながら、自分もいつか父や他の患者のようになるのではないかという不安でいっぱいだった。父が十分に働けなくなり、医療費もかかる。母は将来の生活について大きな不安をもっていた。

「お父さん、私たちも認めてもらおうよ。生きていかなきゃならないんだよ。隣の佐藤さん、仕事、クビになったんだって。『へまばかりして』と毎日怒鳴られ結局クビだよ。あんなにまじめな佐藤さんが。あんだって昔のように仕事ができないじゃない。でも、それは病気のせいだよ。水銀のせいだよ。そのことを認めてもらいために大学病院や県庁に通っているそうだよ。なかなか大変だそうだ。佐藤さんも『どうせ金目当てだろう。』なんて言われている。でも生きていかなきゃいけない。どうしてこんな体になったのか。まずそこをはっきりさせようよ。どうしてこんな体になったのか。お父さん、隠してなんかいないでしっかり調べてもらおう。認めてもらおうよ。恥ずかしいことなんか何にもないよ。人間らしく生きていこうよ。」母は涙を浮かべながら父に言うのだ。父はしばらく母の話を黙って聞いていた。佐和子には父の気持ちも痛いほどわかった。数日経って、父が「わかった。人間らしく生きるために認定をしてもらおう。」と決意した。

それから、父は認定のための検査を受けたが、なかなか認定をされなかった。父の苦悩やいらだちぶりはそばにいてよくわかったし、その間に父の症状はますます悪化し、生活も苦しかった。その後も幾度かの検査を経て、やがて、父も認定を勝ち取ることができた。

しかし、認定されない人たちもいて「新潟水俣病訴訟」の闘いに参加することになった。この闘いは「公害訴訟」として全国的に注目されることになり、多くの支援団体の励ましを受けた。一方で「補償金が目当てだろう。」「そんなことをしていると娘のもらい手がないぞ。」「水俣病なら黙っていた方がいいぞ。」という周囲の冷たい目や誤解、偏見は予想以上に強かった。その後、同じ苦しみで悩む九州の水俣病の人たちとも活動の輪を広げ、全国からより多くの支援を受けるようになった。しかし、裁判は、長引き、様々な紆余曲折を経て、結局、「和解」という結果になった。この長い闘いの中で、年老いて亡くなる者もあった。病気との闘い、裁判での闘い、そして差別や偏見との闘いなど、患者たちは気力と体力の続く限り、多くの相手と闘い続けた。

「新潟水俣病」は、阿賀野川流域の豊かな生活と地域の絆を破壊してしまった。し

かし、その後、多くの人々によってこの破壊されたものを再び作り上げる様々な努力が続けられた。病気が治ったわけではない。多くの命も失われていった。今も懸命な闘いは続いている。

悲劇の舞台となった阿賀野川は、今また、とうとうと水をたたえ、越後平野と人々の生活、心を潤している。この清く美しい流れがいつまでも続くように。二度とこのような悲劇が繰り返されることのないように。豊かなれ、阿賀の流れよ。

#### ※日本三大河港

江戸時代、津川河港は三大河港の一つに数えられていた。三大河港は津川河港のほか、千葉県のリ根川関宿河港（現千葉県野田市関宿町）、岡山県の旭川勝山河港（現岡山県真庭郡勝山町）を言う。

○ワークシート

豊かなれ阿賀の流れよ～新潟水俣病の苦悩をこえて

年 組 番氏名

- 1 新潟水俣病について知っていることを挙げましょう。
  
- 2 佐和子の父は何を苦悩しているのでしょうか。また、被害者にはどんな言葉が向けられたのでしょうか。
  
- 3 自分が佐和子や佐和子の父の立場だったら、どんな気持ちでしょうか。
  
- 4 被害者を「ニセ患者」や「金目当て」と言って中傷したり、差別したりしたのはどんな気持ちからでしょうか。
  
- 5 悲しい思いを繰り返さないために、今日の学習を通して学んだことや考えたこと、仲間の考えを聞いていいなあと考えたことをまとめましょう。



## 新潟水俣病の学習で学んだこと

私は、総合の時間で新潟水俣病を学ぶまで、新潟水俣病のことをあまり知りませんでした。はじめに疑問を持ったのは、今から40年以上も前に発生したのに、未だに解決していないことです。今になって、被害者だと名乗り出る人さえいることに疑問を持ちました。なぜ、あるとき名乗り出なかったのか。追究活動を進めていって、名乗り出られないような被害者に対する中傷や差別があったことがわかりました。

環境と人間のふれあい館で、被害者の語り部さんのお話をうかがいました。お話を聞いていて、悲しい気持ちになりました。一番つらかったことは、自分の子供が幼くかわいい時期に、言語障害があって、言葉をかけてやれなかったこと。患者さんの中には、夜になると頭の中で蝉が100匹も鳴くような耳鳴りがする人もいること。それは、外からはわからなくて、周りの人にはわかってもらえない。本当に悲しいことだと思いました。

そして、私たちは、昭和電工のあった阿賀野川上流にもいってみました。水のおいがる緑のまぶしいところでした。私は、どうしてこんなに美しいところから、毒の水が流されたのか本当に驚きました。

二度とこのような悲劇を繰り返さないために、もっとみんなが起こったことに関心を持つことが大事だと思いました。「タタリ」などあり得ません。やはり正しい認識や理解が必要です。被害者の人は、どんな痛みを感じ、どんな思いで生活しているんだろうという想像力も必要です。そして、人を中傷したり、差別したりする気持ちは、もしかしたら私の中にもあるのかもしれないなあと思いました。もし、隣の人が大きなお金をもらえば、うらやましいし、憎らしく思うかもしれません。また、「あそこから嫁をもらうんじゃない」とみんなが言えば自分もそういうかもしれません。でもそれは、心の弱さ、醜さです。私は、この学習を通して、差別や偏見を生まないように、もっと一人一人がよく考えて、努力することが大事だと思いました。

(2010.3 新潟市立白新中学校3年生生徒作文)